
ゼロの使い魔 - 聖痕を刻まれし者 -

ぬほほほっ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 - 聖痕を刻まれし者 -

【Nコード】

N4059BA

【作者名】

ぬほほほっ

【あらすじ】

初めての彼女とのデートの日にヤンデレ化した義妹に殺されて、神に能力を貰ってゼロの使い魔の世界に転生する話です・・・ユウで書いてましたが、諸事情によりこちらで書かせてもらいます

プロローグ

「帝政ゲルマニア帝国第十七皇位継承者ナギ・ダイ・アルタイ・ゲルマニア様、御入来」

俺は父親・神聖ブリタニア帝国皇帝に、謁見する為に順番を待っている

俺の前に双子の兄であるナギが入っていった

レナ・セイヤーズ皇妃はゲルマニア宮で殺められたと聞いたがテロリストが簡単に入れるところではありませんな

では、真の犯人は……？

怖い怖い、そのような話、探ることすら恐ろしい

ナギが入ったら、周りに居るだろう貴族達が騒がしかった今一番話題の人物だからな・・・双子の弟の俺もそうか

しかし、母親が殺されたというのに、しっかりしておられるだが、もうナギ様の目はない。後ろ盾のアッシュフォード家も終わったな

妹姫様は？

アラシ様は足を撃たれたと。目も不自由になられたとか

ナギが入る前は緊張してたけど、入ったら堂々としているみたいだ

「皇帝陛下、母が身罷りました」

「だから、どうした？」

「『だから』!？」

「そんなことを言うたためにお前はゲルマニア皇帝に謁見を求めたのか。子供をあやしている暇はない。次の者」

「父上！なぜ母さんを守らなかつたんですか！？ 皇帝ですよ？ この国で一番偉いんですよ？ だったら守れたはずです！アラシのところにも顔を出すくらいは!！」

「弱者に用はない」

「弱者？」

「それが、皇族というものだ」

「なら僕は、皇位継承権なんて要りません！ 貴方の跡を継ぐのも、争いに巻き込まれるのも、もうたくさんです！」

「死んでおる」

「え？」

「お前は、生まれたときから死んでおるのだ。身にまとったその服は誰が与えた？ 家も食事も、命すらも、全てわしが与えたもの」

「つまり！ お前は生きたことは一度もないのだ！ 然るに！ 何たる愚かしさ！」

「ナギ。死んでおるお前に権利などない。アラシと共にアルビオンへ渡れ。皇子と皇女ならば、良い取引材料だ」

結局ナギは何も出来ないまま追い出されたな
次は俺か

「帝政ゲルマニア帝国第十八皇位継承者アレクサンドル・ニコラエ
ビッチ・ヘル・ゲルマニア様、御入来」

俺は、呼ばれたので中に入る

兄君さまの直後は酷ではないのか

しかし、先ほど陛下はナギ皇子とアラシ皇女についてのみ、処
遇を申された

同じことよ。傑物と目されようと、レナ・セイヤーズ皇妃が暗
殺されたのだ

もはや目は無い

しかし、あの能力があるなら兵としてなら・・・

うるさいな

皇帝陛下まで後10歩だな

じゃあ、始めるか！！

「此処には沢山の金属がありますね」

右手を真っ直ぐ横に突き出す

フォン！

護衛が持っていた槍をが、急に俺の方に向かって飛んでくる

「この世は弱肉強食でしたよね！？」

飛んで来た槍を掴んで、槍を変形させて鎌にする
皇帝陛下に鎌を構えて駆け出す

反乱！

まさかつ！

貴族達は騒ぐだけで何もしない
護衛が俺を止める為に出て来る

「らっ！！」

鎌を横に薙払って吹っ飛ばす

子供の腕力で、大人を吹っ飛ばす事なんて出来ないが、金属を操る
能力で鎧を操って吹っ飛ばしたから腕力は関係ない

キンッ！

王座に鎌を突き刺す

皇帝陛下の顔の直ぐ横だ

このまま引けば皇帝陛下の頭は二つに斬り裂く事が出来る

「俺は、あんたをソコから突き落としてやる。そして俺がソコに座
って家族を護る」

.....

静まり返る

「何をしている捕らえろ！」

ゲルマニア皇帝が一番信頼しているセルゲイ・オーギュスト・ヴァルトシュタイン郷の一声によって護衛達が俺を取り押さえた

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

周りが騒いでいるが、俺は皇帝陛下を見続ける

皇帝陛下も俺を見る

お互い何の感情も無い目で

「フハハハハッ！」

いきなり皇帝陛下が右手で顔を押さえながら、笑い出した

「何時も女の尻ばかり追っていた阿呆が、こんな事をするとは思わんかったわ！」

悪かったな！

男なんだからしょうがないだろ！！

「しかし！この身に最も近付き一撃を入れた・・・お前は本物に阿呆か？」

見透かすように睨む皇帝陛下

「・・・・・・・・」

何も言わない俺

「気に入った！アレクサンドルは軍の訓練校に入れろ！卒業後はツエルプストー卿の指揮の下につけ！……皇位継承権は残しておいてやる！」

皇帝陛下は、セルゲイ・オーギュスト・ヴァルトシュタイン郷に言った

うそっ！

絶対に剥奪されると思ったのに！

ツエルプストー卿も驚いた表情だし！

そのまま俺は、セルゲイ・オーギュスト・ヴァルトシュタイン郷に担がれて訓練校まで連れて行かれた

俺がゼロの使い魔の世界に行く前の話

今日初めての彼女と初デートをした

二十歳になって初めての彼女だ！

夕飯は彼女と一緒に食べたので、風呂に入ってベットにダイブする

俺の家族は父、義母、義妹と俺の4人家族だ

俺が二歳の時に母が死に、父が1人で8年間育ててくれた

十歳の時に今の義母を紹介されて、いきなり結婚したいと言われた時は驚いたが、承諾？した

義母の連れ子は三つ下で、人見知りの激しい子だった

懐かしいな……よく義母の後ろに隠れてる子だった

「ふあむ・・・つと、今日はかなり疲れてるな」

仰向けで大の字になって目を瞑る

初めてだったから、いろいろ緊張したな

手を繋いだ時は、心臓が張り裂けそうなほどドキドキした

今も胸が痛いくらいだ

初めてのキスは・・・そう、鉄の味だ

・・・え？

「・・・ごぶつ・・・何が・・・？」

胸が熱い、何か液体が口まで這い上がってきた

目を開けると・・・

「・・・お兄ちゃん」

義妹が俺の上で馬乗りになり、包丁で胸を刺していた

「な・・・なん・・・で・・・？・・・？」

痛みは無い

混乱してるからかな？

だんだん力が抜けていく

瞼が重くなってきた

「お兄ちゃんが悪いんだよ？」

グサグサと何回も包丁を突き立てる義妹

・・・よく意識があるな

普通なら即死だろ

「私が居るのに、他の女に手を出すなんて・・・」

義妹は大きく振りかぶる

最後の一突きだろう

視界の隅では、両親が慌てて入ってくるのが見えた

・・・もう間に合わないだろう

包丁は勢い良く顔面に向かってきた

私が誰よりも愛してるのに

それが俺が最後に聞いた言葉だった

「此処は何処だ？」

周りを見渡すが何も見えない

真っ黒だ！

「二次小説で真っ白ってのはあるけど、真っ黒ってあんま無いよな」

現実味が無いからちょっと馬鹿な事を考えてる俺

それにしても、此処は何処だろうか？

床はあるみたいだな

ちゃんと立ってられるし

左右に手を伸ばして・・・何も無いな

「すみません！遅くなりました！」

恐々前に進もうとしたら、幼女参上！

「どっから現れたの？」

普通に気になるよね？

「彼処です」

自分の頭上を指差す幼女
何も見えないな

「簡単に説明しますね」

それは有り難いな

「アナタは死にました。特典付きで転生出来ます。以上！」

「簡単過ぎるだろ！！」

「本当の事ですし」

しよぼーんとする幼女
面倒くさいな

「何で俺死んだの？」

全然覚えてないんだよな

「えーっと、寝る時ヤンデレ化した義妹に刺されて死にました」

何処からか、書類を取り出して、俺の死亡原因を教えてくれた・・・
そうだったな

死後にどうなるか気になったから、考えた事もあるんだよね
いろいろ考えたな

・天国、または地獄に行く
・そのまま消滅する

・記憶が無くなり生まれ変わる

・断片的な記憶があるまま生まれ変わる
などなどだ

そう言えば、極稀に記憶があるまま生まれ変わるって聞いたこともあるな

「・・・ドンマイです」「！）b^ー。（）グッ

励まされても・・・

「因みに、何で転生させてくれるの？」

「くじ引きで決まったからです」

そですか・・・

義妹がヤンデレ化して刺されるって・・・インパクトが強かったから、それかと思っただけどくじ引きか
もしかして俺って運が良かった？

「では、転生先はランダムなので決められません。なので、特典を決めて下さい」

特典点ね

汎用性があるのが良いな

魔法は・・・普通の世界だったらいららないな

機械関連の知識・・・戦国時代とかだったら意味がない

何か無いかな？

「行き先はランダムって言ったけど、ヒントみたいのは無いの？」

「そうですね・・・剣と魔法があるみたいですよ」

剣と魔法か・・・だったら！

「武術と気・魔力操作の才能」

魔力と気が膨大でも才能が無かったら論外だからな
才能だから訓練しないと強くなれないな

「それだけですか？」

「じゃあ、聖痕のクエイサーのサーシャの外見と能力を、そして最後に七罪をモチーフにした力だな」

「能力つてのは、鉄を自在に操る能力ですか？」

「そうだな」

「金属全般に変更しませんか？」

「そんな事出来るの!？」

「出来ますよ。じゃあ、金属全般にして、第六階梯にしときますね」
最強だな!!

「じゃあもう良いですか？」

「ああ」

「それでは・・・準備をします」

地面に魔法陣を描き始める幼女・・・道路に落書きをしている子供
みたいだな

それにしても、どんな世界に行くんだろ？
楽しみだな！

「因みに行く世界は原作通りとは限りません」

「良くある平行世界とか？」

「もつと複雑かもです。例えば、ゼロの使い魔の世界に舞 - Him
e のオーファンが現れたりします」

・・・最悪なシナリオだなorz

原作も何も無いだろ！

「例えばだろ？」

「・・・」

ソツと目を逸らす幼女

・・・例えばじゃないのか!?

「じゃあ、送ります!」

「ちよつと・・・待・・・て・・・」

俺は魔法陣の光を浴びて意識を失った

プロローグ（後書き）

始めだけコードギアスを意識してみました

アルブレヒト3世をシャルルみたいにしてみました・・・どうですか？

誤字脱字よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4059ba/>

ゼロの使い魔 - 聖痕を刻まれし者 -

2012年1月11日08時45分発行